

当たり前の存在にしたい 沖澤のどかさ(芸術総監督)

「やってよかった。やれてよかった。故郷で音楽祭ができたんだ」。フィナーレを飾るオーケストラコンサート。客席からの鳴りやまない拍手に、何よりも達成感が勝った。

今まで演奏会で涙を流したことなどない。今回は出演者ではなく、音楽祭を立ち上げた芸術総監督で発起人の1人。舞台袖で隠岐彩夏さんと熱い抱擁を交わすと感情が一気にあふれた。

青森に音楽を届けたい。その思いはずっと持ち続けてきた。高校卒業後は難関とされる東京芸術大学音楽学部指揮科に現役合格。その後の仏パサン・国際若手指揮者コンクール優勝。メディアで大きく取り上げられる度に「沖澤のどかという名前だが、一人歩きしているような感じがする」。

この先、指揮者としてどこまで到達できるかわからない。もちろん、歩みを止めるつもりはない。道半ばだからこそ、「普段の自分の姿を見てもらい、みんなと一緒に旅がしたかった」。

訪れた先々で、見知った顔が出迎えてくれた。出演者たちは一流の演奏を全力で響かせ、聴衆を次々と笑顔に変えていった。聴く側、演奏する側。双方が音楽の喜びを感得した。「音楽の種は確実にまかれた。意義のある一週間。得られたものは数え切れない」

音楽祭を終えて3週間。気持ちはすでに来年へ向いている。「青森で生まれ育ったら、必ず一度はこの音楽祭に触れたことがある、私たちの演奏をどこかで耳にしたことがある。そんな当たり前の存在にしたい」



どこまでも音届けに行く

隠岐彩夏さん（音楽主幹）
 アウトリーチ（出前演奏会）へ向かう途中、バスの窓越しに流れる風景を眺めていたら、18歳まで過ごした日々の記憶がよみがえった。
 △この道はいつかきた道　ああ　そうだよ＞ 北原白秋作詞の童謡「この道」。

「何もない青森から出たい」との一心で
県外の大学に進学。2016年には若手
音楽家の登竜門として知られる「日本音
楽コンクール」の音楽部門で頂点に立つ。
清冽な歌声の中に歌詞の情感がにじみ出
ると評されるが、表現力の土台となってい

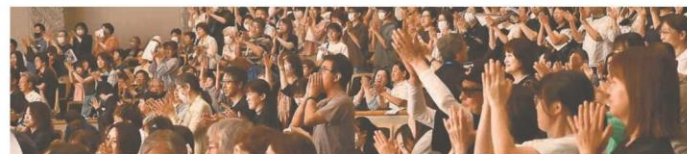
いたの青森で育ちた思い出だった。「二人になたさんで与えてもらったんだと、ふふとのおどろきを感じ知った」と、昨日に訪れた弘前市の養護老人ホーム「弘前温潤園」でこの道歌を歌い終えたときだった。「おかしな……」顔を見知りでもない、その場にいれた誰かの声。家族からかけられなくなぐちをまもっていた、思春期をくらへた。これまでも縁、新たな出会い。来年少以降も一つ二つ大切に紡いでいたいことを頼む。「誰かの役に立つのなら、まてまでも音を届けにいきたい」



音楽が、まちをつなぐ



青い海と
木々の
音楽絮



参加者の声と全プログラム14、15面 主要メンバーコメント・出演者16面